

# 「グッドドライバー・レッスン」静岡・裾野で開催

## モータースポーツと交通安全を組み合わせ 体験型レッスン通じ「グッドドライブ」を

ブリヂストンと横浜ゴムがパートナー参加

8月25日、静岡県の裾野市民文化センターで「グッドドライバー・レッスン(=GDL) in ライフラリー富士山すその」が開催された。ラリーをベースとしたモータースポーツと、セーフティドライブレッスンを組み合わせた体験型の交通安全活動だ。NPO法人グッドドライバー・レッスン(竹道雄康理事長)が主催し、全国に活動の輪を拡げようとする取り組みを強めている。パートナーとしてブリヂストンなどが初期段階から参画し、24年からは横浜ゴムも加わった。自動車関連産業とモータースポーツの関係者がスクラムを組む、新しいスタイルの社会貢献活動とはどのようなものだろうか。現場からレポートする。

GDLは、主催者と開催地の自治体などが地元のドライバーに参加を呼びかけ、会場のキャパシティに相応する定員でレッスンを実施する。主催者の挨拶で開会し、数名のグループ単位で各種のレッスンを体験。すべてのメニューを受講後、「グッドドライバー」の証(あかし)となる修了証を受ける。

「クルマは単なる道具ではないし、運転はいくつになっても楽しいものであってほしい。レッスンでは長くモータースポーツの実戦で腕を磨いてきたドライバーたちが経験に基づきレクチャーする。不幸な事故を未然に防いで、愛車と素敵な時間を長く過ごしていただきたい。そしてグッドドライバーのまま卒業するというのに、このGDLがお役に立ちできたらと考える」。主催する竹道理事長は開催意義について、このように語った。

レッスンメニューは会場キャパや参加人数、天候により多少アレンジされる。「ライフラリー富士山すその」は次のプログラムをメインとした。

【ストレッチレッスン】運転には身体動作をとまなうので、その前にストレッチを行うことは安全運転に効果的。古屋宏インストラクターの指導のもと、風船をアクセルとブレーキに見立てた「踏み間違えないでね体操」を実施。プロジェクター映像を活用し模擬ドライブを体験した。=写真①

【ドライビングレッスン/第1回チキチキグッドドライバー選手権】メインの体験型レッスン。モータースポーツ競技に長年携わってきた運営者がパイロンや交通標識などを用いミニコースを設定。ブレーキポイントや大きな段差の乗り越え、路肩寄せなどの難所のあるコースを、参加者がマイカーや社用車で走る。

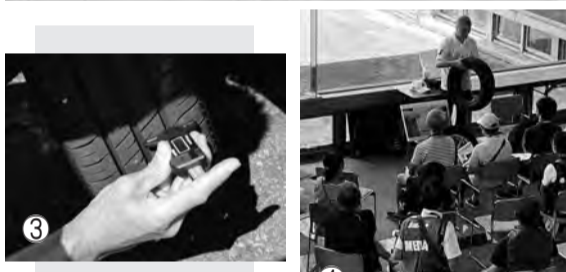
選手権は狙った位置でクルマを停めることができるか、注意ポイントを目視確認しきちんと運転操作できているかをオフィシャルが得点で評価。スコア換算しランキング化するが、速く走るのではなく運転マナーの良さを競う。安全確認を徹底しながらクルマを操る楽しさを身に付けることが目的だ。

今回はベテランラリードライバーの石田雅之選手とコ・ドライバー(ナビゲーター)の遠山裕美子選手がインストラクターとして参加。参加者ひとり一人にアドバイスを送り安全運転のポイントを伝えた。=写真②

コース走行後の待機エリアでは、ブリヂストンの関係者が装着タイヤの残溝を実測し、タイヤの日常管理の重要性を訴求した。=写真③

【タイヤレッスン】この日は、ブリヂストンタイヤセーフティでドライビングインストラクターを務める安藤純氏が講義を担当。タイヤの空気圧と残溝管理・タイヤローテーションが交通安全と燃費・省資源に直結するということを、実物のタイヤとパネルを使いレクチャーした。=写真④

同社のスタッフは「交通安全はタイヤメーカーの最重要テーマ。より安心して心地よいモビリティライフを支え、すべてのひとが自分らしい毎日を歩める社会の実現につながる取り組みの一環。ブリヂストンとして、理解しやすい方法でタイヤチェックの重要性をお伝えしていく」と語った。



【自転車レッスン】GDLの参加者とは別で、地元の児童が対象。ブリヂストンサイクルが運営に協力した。テーマは「交通ルールを知って楽しく自転車に乗ろう」。安定して自転車に乗るための予備体操と、交通法規をクイズ形式で問う「うんこ交通安全ドリル」を実施。ヘルメットの装着体験と、模擬の市街地コースの実車走行を行った。

これら以外にもドライビングシミュレーターを使ったレッスン、自動アシストブレーキを体験するサポカーレッスン、シニアカーC+Walk(立ち乗りパーソナルモビリティ)試乗など、多彩なプログラムが用意された。またメイン会場のホール壁面ではWEC(FIA世界耐久選手権)の写真展が行われた。

「GDL in ライフラリー富士山すその」には、24歳から83歳と幅広い年齢層から男女の現役ドライバーが参加。自転車レッスン受講者を含めると58名が参加した。日常の運転では体験できないメニューを味わったことで参加者はすがすがしい表情をみせた。主催者側がめざす地域の交通安全意識を高めることに寄与した。=写真⑤

一方で、交通安全に対し関心の低いひとたちが一定数いるのも事実だ。そのような層にどのようにアプローチし訴えていくかがこれからの課題。プログラムのマイナーチェンジなどイベントにフレッシュ感をもたせることや適切な情報発信が必要だろう。地域社会全体で継続的に取り組み、活動が進化していくことが期待される。

### 藪中建二副理事長に聞く

#### 26年度には認定NPO法人へと成長を

—19年にGDL実行委員会として発足し、20年にはNPO法人化された。〈安全運転〉の啓発という社会活動は継続して行



われることに意義があるのではないかと。

「前身の実行委員会、現在のNPO法人はもとも、主に北海道でラリー競技に参加していたクラブチームが母体。ラリーは一般の公道を使用して行われることが多く、地域社会の皆様のご理解とご協力を得られなければ成り立たない。モータースポーツに参加してきたわたしたちが地域の皆様に〈恩返し〉できることはなにか、が考えの根幹にある。

プロドライバーがモータースポーツ活動を通じて培ってきた運転技術や運転するときのポイントをお伝えすることはとても説得力が高い。安全運転の要点を楽しく、わかりやすくお伝えすることで、年々増加している高齢ドライバーの事故防止に貢献したいと考え、この体験型レッスンを開催している。

TOYOTA GAZOO Racingによる国内ラリーの入門編、ラリーチャレンジ(以下、ラリーチャレ)の開催に合わせて、GDLを開催することが多い。各企業からパートナーやサポーターとして協賛を得て、運営に協力をいただき活動し続けてきている。タイヤメーカーからもブリヂストンに加え、ことしから横浜ゴムもパートナーに参加いただいている」

—モビリティが多様化し、啓発の仕方にも多様化が求められる。

「ひとくちに交通安全と言っても、エリアにはそれぞれ独自の地域性が醸成され、風土やひとの気質が絡みあっており、実際の現場は複雑だ。そこで活動するにあたっては地元の自治体の皆さまに後援や共催をいただき、地域社会に融け込むことを図っている」

—この活動をどう浸透させ、今後どのように拡大していくのか。

「ラリーチャレ時での開催だけでなく、GDL単体での開催も少しずつ増やしてきた。また、地域の企業・法人から社員教育の一環として、GDLの開催が可能かどうかという問い合わせを多くいただくようになった。社用車を使い毎日のように運転するドライバーに向け、GDLのスタイルで研修を行うことにより安全運転の啓発や安全意識が一層高まることが期待される。そのようなリクエストに応えたいと考えており、今後の活動計画にも織り込んでいる。

活動の範囲を広げるためには、わたしたち自身も組織としてもう少し成長する必要があると考える。そこで26年度に『認定NPO法人』をめざしていく。賛助会員100名以上を2年間継続することで、それが実現する。

『認定NPO法人』のメリットは、個人や法人からの寄付に対し税制上の控除や損金の算入が優遇されること。〈ふるさと納税〉のようなもので、寄付金が集まりやすくなる。それに向けて会員特典を企画し制作を検討するなど、具体的に動き始めたところだ」